

## 1 批判の矛先

今日の聖書箇所は、先々週の続きです。全体の後半部分、あるいは結び、といってもいいところです。

あるときイエスが、あるファリサイ派の人から食事の招待を受け、食卓の人となります。

しかしイエスが、当時の習慣に反して、食事の前に手を洗わなかった、清めなかったことから、招待した人をはじめ、そこに来ていた人のあいだで、変な、怪しむような空気が流れたのです。

それを察知してイエスは、怪しんでいる人たちを、むしろ批判する言葉を口にし始めたのです。先々週の箇所(三七〜四四節)は、そのイエスの言葉を伝えるだけで終わっていました。そして私どもも、イエスが一方的に語ったことについて、逆にいささか疑問にも感じたところでした。

イエスを招待したのは、ファリサイ派の人、そこに集まっていたのもファリサイ派の人たちで、イエスの言葉は、相当強いファリサイ派批判だったのです。いくつかりました。

「ファリサイ派の人々は不幸だ」という言葉を導入にイエスは、三つのことを言っていました。一つは、あなたたちは、律法や、律法を守るための規則、人間的な規則や言い伝えには、細心の注意を払っているけれど、もっと大事な、正義の実行や神への愛などはおろそかにしている(四二節)。二つ目は、会堂では上席を好み、広場では挨拶されることを好む。神様以上に自分があがめられることを好んでいるという批判でしょう(四三節)。三つ目は、あなたたちは「人目につかない墓」のようなものと言われます。その意味は、人は知らぬ間に汚れてしまい、間違ったところに連れていかれるということです(四四節)。本当に厳しい批判です。以上が、先々週私どもの読んだところです。

さて今日の箇所、イエスの批判の矛先は、食事の席に出ていた律法の専門家、律法学者に向けられます。

最初、一人の律法学者が苦情を言い立てます(四五節)。しかし結局、ここもイエスの一方的な批判に終始しています。その結果どうなったか、今日の箇所の終わりに書いてあります。

イエスがそこを出て行かれると、律法学者やファリサイ派の人びとは激しい敵意を抱き、いろいろの問題でイエスに質問を浴びせ始め、何か言葉じりをとらえようとねらっていた(五三〜五四節)。

こうなるのは目に見えていたといえるかも知れません。イエスの批判はそれほど厳しく、かつ、何よりも、イエスの言葉は、律法学者やファリサイ派の考えや行いに命

中したのです。このやりとり、人間的に見れば、結果はこうなるほかはなかったでしょう。

いまお読みした中にある、「質問を浴びせ始め」、「この「浴びせ始め」が、少し気になります。というのも、フアリサイ派と律法学者がイエスを批判し始め、何とかしようとしたのは、ここがはじめではないからです（五・一七以下、六・一一他）。

ルカが、ここで、「し始めた」と書いたのは、じつは、イエスとその敵対者との軋轢が、ここから、一段と激しくなっていく合図のようなものでありました。それは十字架への道を歩むイエスの敵対者の攻勢が強くなっていくというより、イエスご自身の、メシア（キリスト）としての歩みが、いっそう確かなものとなっていくことの証しと理解すべきです。

## 2 律法学者の問題

今日の箇所ではイエスの批判は、申し上げていくように、「律法の専門家」、「律法学者」に向けられています。律法の専門家、律法学者というのは、律法の解釈などを通して、民衆の生活に多大な影響をもっていた指導者グループです。新約の時代、イエスの時代は、ユダヤの最高法院（サンヒドリン）の構成メンバーも占め、やがて祭司や長老などと一緒になって、イエスを十字架につけたということは、皆様、よくご承知のことです。

この律法学者の何をイエスは、また、どのようにイエスは、批判しているのでしょうか。

少し分かりにくい言葉がつづいていますが、ここも、「律法の専門家も不幸だ（口語訳、わざわざいである）」という言葉か、三回くり返されているので、それを手がかりにして整理することができます。

その前に一つ、はっきりさせておくべきことは、イエスと律法学者の対立は、律法そのものを巡ってではないということです。イエスが律法批判をし、律法学者がこれを擁護しているという構図ではないのです。そもそも旧約の律法は、すべて神の御心の表れとして、イエスにおいても、律法学者においても、第一に重んぜられるべきものであったことは言うまでもありません。

問題は、それをどう理解し（解釈し）、どう実行するかということです。律法に従うことは、神の御心に従う、それに生きることではなりません。そのようにならなかつたり、曇らされたりすることがあつてはならないのです。神に従うことが第一なのです。

最初の「あなたたち律法の専門家は不幸だ」という言葉は、以下のような事態に対して言われています。

イエスは言われた。「あなたたち律法の専門家は不幸だ。人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしないからだ」（四六節）。

これらの言葉は、食卓に着くさい最初に問題になった、食前に手を洗う・洗わないという問題や、安息日規定の順守の問題（六・六以下、他）など、ほぼすべてのことに関係することです。

詳しくは申し上げませんが、律法学者たちは、律法を守るという目的で、考えうるかぎりの義務の規定をつくりあげたのです。果たして人々はこうした規定に囲まれて生活することになります。一挙手一投足、違反するのではないか、罪を犯すのではないかと恐れにとらえられ、弱い良心は攻められ、根本的な不安の中で生きることを余儀なくされたのです。

神に従い、神との交わりの喜びに生きること、この本来のこと、第一のことが、規則、掟、言い伝え、慣習などによって、どこかに行ってしまうことになったら、そうならないようにしないとしたら、律法の専門家は、聖書の教師として、まことにわざわざいだと言わざるをえないのです。

二つ目の「あなたたちは不幸だ」は、律法学者が、預言者の墓を建てていることに向けられます。

あなたたちは不幸だ。自分の先祖が殺した預言者たちの墓を建てているからだ。

こうして、あなたたちは先祖の仕業の証人となり、それに賛成している。先祖は殺し、あなたたちは墓を建てているからである（四七〜四八節）。

これは少し説明が必要かも知れません。歴史的背景として、当時、律法学者の指導で、預言者が葬られていると伝えられている場所に、お墓や記念碑が派手に建てられるということがあったようです。

律法学者は、そうすることによって、民の尊敬の対象である預言者と、自分たちを同列に置き、おそらく、権威づけをしようとしたのでしよう。

しかしそれに対してイエスは鋭く批判しています。預言者は殺された人も多いのですが（その最後の例が、ゼカルヤ）、それは、預言者の語る神の言葉を人々が聞きたくなかったからです。殺された預言者を殺した者たちが顕彰するのは欺瞞だとすれば、神の言葉に聞こうとしないあなたたち律法学者が、預言者の墓を建てて顕彰するのも欺瞞でなくて何であろうかと。

### 3 教会の使命

三つ目の「あなたたち律法の専門家は不幸だ」は五二節です。

あなたたち律法の専門家は不幸だ。知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきたからだ（五二節）。

ファリサイ派、律法学者に共通しているのは、律法とその規則に拘泥し、神の言葉の真意に聞こうとしなかったことです。彼ら自身が、仮にそうであることを認めるとしても、他の人たちが神の言葉に聞こうとすることまで邪魔してならないのは、いう

までもありません。

彼らは「知識の鍵を取り上げ」る、とあります。マタイでは(二三・一三)、「人々の前で天の国を閉ざす」と表現されています。知識とは、ここでは、天の国に入るための知識、神の道に歩むための知識です。人間の知識ではありません。与えてもらわなければならない知識です。神の御心を知る知識です。神の言葉から与えられる知識です。それを人々から取り上げてはなりません。

さて、ここまで、私どもは、イエスのファリサイ派批判、律法学者批判を、二週にわたって見てきました。

こうした批判の、内容はともかく、それが始まったときのことは、かなり一方的という印象を私どももったわけです。はじめに申し上げたように、イエスがこうしたことを、いわば「しかける」ということは、私どものイエスのイメージとは合わないようにも思います。

しかしこう考えたらどうか。福音書を書いたルカは、ここにイエスによるファリサイ派批判、律法学者批判の言葉を集めています。何のために集めたかということです。

ルカの思いの中にあつたのは、たんにイエスの時代のファリサイ派や律法学者ではありませんでした。そうではなくて、ルカ自身が生きている時代の教会のこと、キリスト者のこと、したがって、私どものことでもあつたのです。ここに書いてあるような、イエスの痛烈な批判に当てはまるのが、教会でも起こっていた、出てきていたということでは必ずしもありません。しかしそれは、いつの時代も、私どもも心しなければならぬことではないでしょうか。

ファリサイ派に向けられた批判。規則を守ることに熱心でも、正義を行い、神を愛することは不熱心。まるで神よりえらくなったような思い上がり。今日取り上げた律法学者に向けられた批判。他人(ひと)に厳しく要求し、自分は他人の重荷を軽くするため指一本すら動かさないとすること。本来イエスの弟子に求められていること、すなわち、神の言葉に耳を傾け、これを守る、そういう在り方を真剣に求めているかどうか(一一・二八参照)。これらは、信仰と信仰の生活にかかわることとして、いつも私どもの問題でもあります。

イエスの言葉を、いま私に、私どもに向けられた言葉として受けとめること、前回と今回、そのように受けとめることができれば、まことに幸いです。

さて今日は、二〇二一年、最後の礼拝を迎えています。今年も、個人的にも、教会的にも、いろいろのことがありました。教会の大切な方々を何人も天にお送りしました。天上がにぎやかになるのはいいのですが、私どもはさびしいものです。ご関係の方に改めて慰めを祈ります。

クリスマス・メッセージでも紹介したように『日々の聖句』(ローズンゲン)が示した来年の「年の聖句」は、「わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない」(ヨハネ六・三七)という主イエスの言葉です。一人も失うことなく、神の救いに与らせる、このイエスご自身のミッション「使命」はまさに私ども教会のミッションです。新しい年へ向かって共に歩んでいきましょう。